

## 謹 弔

次の会員がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

前田昌則氏	山陽小野田医師会	12月6日	享年67
荒川清氏	宇部市医師会	12月12日	享年76
長沼芳季氏	徳山医師会	1月3日	享年94
潮浩氏	山口市医師会	1月13日	享年93
林長生氏	下関市医師会	1月13日	享年100
野見山宏壽氏	徳山医師会	1月15日	享年76
渡邊睦雄氏	下関市医師会	1月18日	享年92

## 編 集 後 記

「共感」、ご存知ですね。よく聞きますが、私には捉えどころのない難しい言葉の一つです。

「共感はとても大事な感情だけど、『そうだよ』と思えない人たちとの間に“殻”を作って、コミュニケーションを閉ざしてしまうもの」という国文学者ロバート・キャンベル氏の発言を知り、ますます苦手ワードです。辞書で似たような言葉と共に調べてみると、

エンパシー (empathy) …the ability to understand other people's feelings and problems

シンパシー (sympathy) … 1, the feeling of being sorry for someone who is in a bad situation  
2, belief in or support for a plan, idea, or action, especially a political one 以下略。

どうもエンパシーは能力でシンパシーは感情や行為のようですが、自分はこの二つを区別できていない気がする。

英国在住ライターの前田みかこの『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』を昨年読んだところ、著者の中一の息子が授業で「エンパシーとはなにか」と問われ、「自分で誰かの靴を履いてみる」と答えるエピソードが印象的だった。「To put yourself in someone's shoes」は定型表現らしいが、「共感」の意味が少しつかめた気がして、彼女の本をもう一冊読んでみる。その著作『他者の靴を履く』には、さまざまなエンパシーの定義、評価が論じられている。肯定派によると、エンパシーは各人が心に持つ認知的バイアスを外すことであり、それぞれが多様性を共に認め合う社会に繋がる。一方の反対論者は、感情的に他者に共感することには危険性があり、エモーショナルに他者に入り込むと状況の判断ができなくなるので、エンパシーは「善」ではないと否定的だ。

この本、私には難しく行きつ戻りつ長旅で、「エンパシー」まで遠そうです。当分「共感」という言葉を使えそうにないですね。

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』新潮社

『他者の靴を履く アナーキック・エンパシーのすすめ』文藝春秋

(常任理事 長谷川奈津江)